

研究資料

ハードな身体接触を伴う運動の教育的効果及びその意義について

Movement with hard body contact gives educational effects and significance

筒井 茂喜¹⁾ 日高 正博²⁾ 後藤 幸弘³⁾
 Tsutsui Shigeki¹⁾ Hidaka Masahiro²⁾ Goto Yukihiro³⁾

キーワード ハードな身体接触 攻撃的な感情の表出の制御 身体への気づき

1. 目的

子どもを含めた若者の心と身体の異変が指摘されている。

佐藤(1995)は、「精神的な意味における身体の危機」として、「人と交われない硬直した身体、感受性と応答性を喪失した身体、突発的に暴力と破壊へと向かう身体、自虐的行為をくり返す身体」という言葉で子どもたちを含めた若者の心と身体の異変を表現している。

竹内(1998)は、人と交流し合うことのできる技法・技量・術を身につけた「自我の祖型としてのからだ」になれないでいるとし、子どもの心と身体の異変を指摘している。

また、鷺田(1998)は、「自分の身体、自己の存在を手触りをもって実感することがなくなってきている。そして、人は、身体を自分の持ち物であるかのように感じ、自由にデザインしたり、商品のように売買する。こうして身体は、実体として誰のものかわからなくなる」とし、そのような現代人の身体を「パニックボディ」と呼んでいる。

さらに、2009年度に全国の小・中・高校が把握した学校内外での暴力行為は、4年連続で増え、過去最高の6万913件となった。特に小学校は、前年度比10%増を示し、暴力行為の低年齢化が懸念されている(文部科学省,2010)。文部科

学省は、「地域や学校の規模にかかわらず、小さいなきっかけで暴力行為に及ぶなど、自分の感情をうまくコントロールできずに暴力に走る場合が目立つ」(朝日新聞,2010)としている。

一方、身体接触が心と身体に関する問題の解決につながる可能性が報告されている。

例えば、山口(2004)は、「スキンシップを意図的に多く取り入れた遊びを続けた園児は、そうではない園児に比べ衝動性が低減した」としている。

また、茂木(2007)は、幼稚園児とその保護者を対象に、身体接触量(注1)と子どもの社会生活能力の獲得に関連がみられたとし、十分で且つ適切な母子の身体接触をもつことが、社会性の重要な要素である子どもの意志交換能力の獲得につながるとしている。

村田(2002)は、昔から日本には仲間と群れ、体と体をぶつけ合い肌を触れ合って遊ぶ、どう馬などの伝承遊びがあり、こうした身体接触を伴う遊びを通して、子どもは、「自己と他者とのちがい」「自己の体への気づき」「他者との距離感」をつかみ、互いの関係をつくる力を身につけたと思われるとしている。

すなわち、著者らは、佐藤、竹内、鷺田に共通する危機感を持っており、子どもを含めた若者の心と身体の異変を、「自分の身体を実感を持

1) 明石市立江井島小学校

2) 長崎大学

3) 兵庫教育大学

Eigashima Elementary School

Nagasaki University

Hyogo University of Teacher Education